

教育実習事前指導(1)の改定[†]

－大学における教育実践科目の指導－

池本喜代正*・川島 芳昭*・熊田 禎介*・南 伸昌*
宇都宮大学教育学部*

従来、本学部においては教育実習の事前指導(1)(2)は、主には附属学校教員により小学校・中学校教育実習Ⅰ(観察・参加)に臨む心構えやマナーの説明、児童・生徒を含めた附属学校の教育現場紹介などが行われてきた。しかし、教育実習Ⅰ受講生へのアンケート調査などから、中心的な活動である「授業観察」に関する指導の充実が以前からの課題であった。平成21年度に、事前指導(1)(2)を改定し、事前指導(1)において新たに「授業観察・記録の指導」を大学教員が行うこととした。その背景や実施状況、効果について報告する。

キーワード： 授業観察、教育実習、事前指導、大学教育、学習指導

1. はじめに

本学部の教育実践科目の柱は、図1に示すように

- 1年次：教師入門セミナー
- 2年次：教育実習Ⅰ(附属幼小中)
- 3年次：教育実習Ⅱ(附属小中)
- 4年次：教育実習Ⅲ(協力校)

となっている。

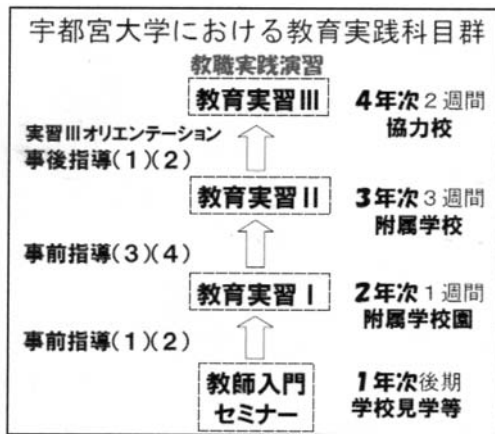


図1 教育学部の教育実践科目群

教師入門セミナーの免許法上の位置付けは「教職の意義等に関する科目」であるが、附属学校園教員による講義や、公立小学校や附属小中学校の見学も

含まれており、教育実践科目の導入として位置付けられている。教育実習Ⅰは「観察・参加」として位置付けられており、5日間で幼小中における学習の様子を観察する。教育実習Ⅰは附属学校園で実施するが、指導の主体は大学教員である。教育実習Ⅱでは、教壇実習を始め学校における営み全てを、指導者側の立場で体験しながら学んでいく。その実施・指導を主に担うのは附属学校教員であり、大学教員は「事前の準備」と「学生の状況確認」、「何かあった場合の対処」が主な業務になる。教育実習Ⅲは教育実習Ⅱを発展させたもので、その実施・指導は協力校教員にお願いし、大学教員の仕事は教育実習Ⅱと同様である。

教育実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの前後には事前指導(1)(2)(3)(4)、事後指導(1)(2)、実習Ⅲオリエンテーションが配置され、それぞれの教育実習の準備や振り返りの時間として機能している。平成20年度まではこれら事前・事後指導の実質の実施主体は、事前指導(1)(2)(4)と事後指導(2)が附属学校教員、事前指導(3)は教育学部附属教育実践総合センター、事後指導(1)は教育学部の3年次担任教員、実習Ⅲオリエンテーションは教育実践推進室(以下「推進室」)であった。このうち、事前指導(1)と(2)は、それぞれ同じ日の午前と午後で実施され、初め1時間程度推進室員が説明を行った後、昼休みを挟んで夕方まで附属学校教員指導の下での活動を行っていた。主な内容は教育実

[†] Kiyomasa IKEMOTO*, Yoshiaki KAWASHIMA*, Teisuke KUMATA* and Nobumasa MINAMI*: A revision of the prior guidance (1) for the student teaching - The instruction of the educational practice subject in the undergraduate course -.

* Faculty of Education, Utsunomiya University

習Ⅰに臨む心構えやマナーの説明、児童・生徒を含めた附属学校の教育現場紹介などであった。

これら一連の体系が十分に機能しているかという
とそうでもなく、主な問題としては、教育実習Ⅱに
行って一から学習指導案の書き方を学ぶ学生や教育
実習Ⅰにおいて何をどう観察し記録すれば良いのか
戸惑う学生が無視できない割合で存在することが挙
げられていた。このうち、学習指導案の書き方に
ついては、教育学部における各種教科や教科教育法等
の履修順序の整備という大きな課題はあるが、それ
らの科目の中で指導を受ける機会が一定量確保され
ている。そこで、推進室では「授業観察・記録方法
の指導」に絞って対策を検討してきた。そして平成
21年度より、事前指導（１）（２）を実質も二つに
分け、事前指導（１）では大学教員が「観察・記録
方法の指導」を行い、事前指導（２）では附属学校
教員が教育実習Ⅰのオリエンテーションを行うこと
とした。

なお、学習指導案の書き方に関しては、小学校限
定ではあるが、平成 21 年度は附属小学校教員によ
る「学習指導案の書き方講習」が行われ効果を上げ
ている。次年度以降もその活動を発展させていき
たい。

2. 従来の授業観察方法の指導

「授業観察記録をどう取って良いのか判らない」
という実習生の声は、以前から聞かれていた。そこ
で、平成 19 年度の教育実習Ⅰから、実習の初日に
「モデル授業&振り返り」を設定した。これは、附
属学校での授業を大学教員と共に 1 時間観察し、次
の時間に大学教員指導の下でその授業の振り返り
を行い、授業観察の観点やどのように記録を取るのか
といったことを共有することをねらいとするもので
あった。

この活動に対する学生の評価は高く、アンケート
調査でもほとんどの学生が「役に立った」を選択し
ていた。しかし、引率教員を 3 名程度しか確保でき
なかつたため、学年ごとに実習生をまとめてモデル
授業観察を行ったとしても、小学校の場合は「2 校
時観察→3 校時振り返り」と「4 校時観察→5 校時
振り返り」の 2 部構成で対応したりした。そのため
に教育実習Ⅰのスケジュールが複雑になり、附属校
教員や引率教員の理解を得るのが難しくなった。ま
た、できるだけ効果的に振り返りを行うためには、

観察する授業の教科と引率教員の専門とをすり合わ
せる必要がある。各専攻・コースの 2、3 年次担任
教員 30 名の引率日程調整と並行してその調整を行
うのは大変な作業であった。その上、時間割等のた
め観察にあまり適さない授業を割り当てられる場合
がある、2 週目以降は本実習生の授業を観察するた
めに実習に参加する週や学校種による当たり外れが
大きい、などの問題も出てきた。

その他に、空間的・時間的にも問題を含んでいた。
「モデル授業観察」は通常の学校行事に参加するだ
けなので、1 クラスに入る人数が少々多くなっても
大きな支障はないが、「振り返り」は授業に使って
いない別の部屋を確保する必要がある。平成 19 年
度から附属学校園の校舎改修が入ったこともあり、
実習生の控え室の確保にも困る状態で、体育等で空
いている教室を使わせていただいたりした。その調
整で附属学校教員の負担を増やすこととなってしま
っただけでなく、慣れない環境で臨機応変の対応を
取らざるを得ない実習生や引率教員の負担感は大き
いものがあつた。

時間的な問題は、スケジュール全体の余裕の無さ
である。教育実習初日はガイダンスで 1～2 時間要
し「モデル授業&振り返り」で 2 時間使うために、
落ち着いて授業を観察したり子どもと触れ合ったり
する時間がほとんど取れなくなってしまう。そして、
初日の通常の授業観察時間を 2 時間程度しか取れな
いため、二日目以降のスケジュールにも余裕がなくな
っていた。

以上の点を考え合わせて、「授業観察・記録方法
の指導」は確かに必要であるが、教育実習Ⅰの最中
に行くことは適当ではなく、実習に行く前に大学で
行うことが望ましいという結論に達した。

3. 事前指導（１）の基本設定

3-1. 授業録画の選定

「授業観察・記録方法の指導」を行うためには授
業を観察させる必要がある。しかし、200 名程度の
受講生を適正な規模に割り振り、大学教員とともに
学校現場に向いて授業の観察をさせるということ
はモデル授業の設定以上に手間がかかることになっ
てしまう。そこで、生の授業に準ずるものとして、
授業のビデオを観察させることにした。

ここで、教育実習Ⅰの受講者の専門・志望職種な
どが様々であることが問題となる。小学校教員希望

者もいれば中学校、高等学校希望者もいる。また、専門とする教科は 10 種類ある。せめて小中に分けて実施することも考えたが、手間を考えると現実的ではない。そういった細やかな対応は、本来は大学の授業で取るべきもので、本授業では授業観察の観点や記録として整理する観点など、どの教科・学齢においても共通する要素を学ぶことが目的である。従って今回は、小中の全学年・教科の中から共通性の高い授業を選定することとした。

その際、教科による得手不得手が敷居になってしまうと本来の目的が達成されないので、授業は小学校のものにすることにした。また、大学生の様に「理系/文系」で色分けされてしまうと、理科や社会といった特徴的な科目の理解度の個人差が大きくなってしまふ。そこで、低学年の算数の授業を第一候補として探したところ、数学教育の教員から、授業用の解説付き授業ビデオを提供戴けることになった。

事前指導(1)の時間は2コマ分なので、指導の進み具合次第では時間に余裕ができるかもしれない。そこで、もう一種類の授業ビデオを用意することとした。こちらは、教育実習Ⅰの様子を見ていて、記録の際に一番戸惑いを感じられた「体育」の授業を検討した。幸い、保健体育科教員が、附属小5年生に行った教育実習生の授業のビデオを保管されていたので、それを提供戴いた。

3-2. 指導体制

効果的な指導を行うためには指導の体制を検討する必要がある。今までの事前指導(1)のように、200名余を一つの教室に集めて大画面で授業を観察し、一人の教員が観察の仕方や記録の取り方を指導していく方法が、手間という点では一番効率的ではある。しかし、「観察の観点」や「何を記録するか」といった個々人の「考え方」に対する指導は、臨機応変な対応が必要とされ、個別対応が理想となる。そして、指導者に対する受講生の数が増えるに従い効果は落ちていってしまう。この「手間」と「効果」二つを考え合わせ、「モデル授業観察&振り返り」の経験を生かして、大学教員一人が15名程度のグループの指導を行うことを想定した。

これは、各専攻・コース(計15)から担当教員を一人選出してもらおうとすると同程度の人数になることも考慮した。担当教員の選出方法はいろいろ議論のあるところではあったが、教育実習Ⅰの引率など

で専攻・コースごとの選出という形式に馴染みがあること、選出された教員に不都合が生じた場合の代替等の対応を依頼することを考慮した場合、専攻・コースという選出母体が現時点では適当であると考えられたので、基本的には各専攻・コースの2年次指導教員に担当をお願いすることにし、最終的な人員の決定は各専攻・コースに委ねることにした。

この15グループに受講生を分けることになるが、専攻・コースごとの学生数は4人から24人までの幅があり、そのままでは指導効果や負担の公平性の点から大きな問題がある。教師入門セミナー方式で専攻・コースをシャッフルして15グループ作る方法も検討したが、初めての試みなのでできるだけ顔の判る学生がいる方が指導者側のストレスも少なくなる。受講生の総数は約210名なので、15グループに均等に分けると14名となる。従って、14名を目安として、専攻・コースの集団をできるだけ考慮しながら14名より多いところは他に回し、それより少ない専攻・コースの担当者は他で余った学生の指導も受け入れるという形で割り振りを行った。その結果、図2の表に示すようにグループの人数を10~16の範囲に収めることができた。

◇指導体制

1. 141教室(もしくは2教室)で実施。教育実践推進室2年次担当が担当。
 2. は全体を15組に分け、3組ごとに一つの教室で授業観察し、組ごとに振り返り等を実施。各組の担当は教員をベースとする。(→◇担当体制)
- 各教室に推進室員1~2名がサポートで付く。

◇担当体制：教科を基準にした割り振り

1121年度の教育実習Ⅰ受講予定者は207名で、15専攻・コースで均等割ると14名ずつとなる。受講生全体を専攻・コースを基本とした15組に分け、3組ごとに一つの教室で授業観察等を実施する。各専攻・コースの担当者への学生の割り振り案を次に示す。

専攻・コース	参加学生数	担当教員の所属	担当する学生の所属と人数	クラス
学校	16	学校	学校16名	①
国語	21	国語	国語15名	②
英語	8	英語	英語8名+国語8名	③
社会	17	社会	社会17名	④
特別支援	21	特別支援	特支11名	⑤
地域	4	地域	地域4名+特支10名	⑥
数学	21	数学	数学11名	⑦
技術	7	技術	技術7名+数学7名	⑧
美術	12	美術	美術12名	⑨
理科	15	理科	理科15名	⑩
家政	12	家政	家政12名	⑪
環境	15	環境	環境15名	⑫
音楽	11	音楽	音楽11名	⑬
保健	10	保健	保健10名	⑭
スポーツ	14	スポーツ	スポーツ14名	⑮
高校実習	14	推進室	スポーツ6名+環境6名+販売プログラム3名	⑯

振り振り教室：①-⑮(ルネメディア教室1、②2301、③2302、④2302、⑤2302、⑥2301) 2年次担任をベースに、専攻・コースが責任を持って担当者を選出する。

【重要】選別・欠席者への対応

選別や欠席者がでないよう、学生への周知徹底をお願いいたします。もし、差別、欠席をする学生が当たるときは、担任教員が責任をもって補講を行ってください。

図2 事前指導(1)実施体制

授業ビデオ観察のときからそれぞれのグループに分かれて実施するとすると、15教室用意する必要がある。また、一人の担当教員がそのグループの学びに対する全責任を負う形となってしまう、グループ

によって指導の差が生じる可能性も懸念された。そこで、教室の規模も考慮して、図2の表の右端の列に示すように、三つのグループをひとまとめにして一つの教室で授業観察を行うこととした。そして、授業観察や記録の取り方の指導などは、基本的にはグループごとに担当教員の主導で行うが、同じ部屋の3教員が互いにフォローし合って指導のレベルを揃えられるようにした。

3-3. 実施日の設定

実施日の設定は、担当教員に大きく依存する。教育学部の時間割では、学部共通でまとまった時間が取れるのは水曜午後しかないが、その時間帯には第一水曜日は入試委員会、第二は教務委員会、第三は幹事会、第四は教授会が定例で入っている。

入試委員会の委員には、2年次指導教員と推進室員合わせて6名の委員がいる。また、実施時期を7月と考えると、第一水曜日には事前指導(4)があり、推進室員2名が附属小中に向向く必要がある。教務委員会の委員には、正副委員長を初めとして、2年次の指導教員が5名おり、それ以外に推進室員が副室長を初めとして3名いる。幹事会に所属しているのは2年次指導教員の3名である。教授会は教育学部教員全員が出席する。

以上を考え合わせて、実施日は7月の第三水曜日5~8時限とした。実際に担当教員を募ったところ、一専攻を除いて2年次の指導教員が担当することとなった。

3-4. 指導方針及び資料の検討

実際の指導内容は、ビデオの授業を「導入」「展開」「まとめ」の3パートに分け、それぞれのパートごとに授業観察(教室ごと)とそのパートの観察の観点・記録の取り方指導(グループごと)を行い、教室内3グループの活動が一段落したら次のパートへ移るという流れで行うこととした。

このような指導を効果的に行うためには、用いる教材の中身が重要である。大元になる授業の録画は、教育学部教員から提供戴いた「小2算数」「小5体育」共に加工なしで用いることとした。それらを各教室で使うことができるように、教室の数(6)+予備(2)の計8枚ずつDVDで準備した。

授業の観察記録には、従来は「教師の言葉掛け」「児童・生徒の反応」「板書の活用の仕方」といっ

た観察の観点を紹介し、各自でその時間のテーマを決めて観察記録を取るよう指導していた。今回、複数の教員が個別に指導を行うため、教員ごとの指導の均質化を図る必要があること、また、学生に観察記録のスタンダードを身につけさせることをねらいとすることなどから、「授業観察記録シート」を導入した。(図3)

第2学年 算数科「●はいくつかな?」 授業記録		
教師の働きかけ (授業録1、発問録2、板書録3)	子どもたちの反応	気づいたこと (気づいたこと、気づかなかったこと、気づかなくて良かったこと)
1 学習課題の確認をする。 劇で学習の場面づくり。 「みんなに魔女からの挑戦状が届く。その挑戦状にある問題4を解く。」 学習課題の設定をする。 (魔女登場) ●の数を、いろいろなやり方でもとめよう T3:「●はいくつかな?」のカードを黒板にはる。 T3:わかるかな。 T3:●の数を求める方法をたくさん見つけること。 (魔女の進捗) T1:どんな道にやれいよいよのだから。分かん人数えてくれる。 (魔女からの挑戦をうけよう!) T1:黒板に「●はいくつかな?」のプリントをはる。 T1:4ってどこにあるか指してください。 T1:左側でいくつあるの。 T1:だから4×5らだつて。 T1:そうすると答えはいくつになるだろう。 T1:いろんなやり方でこの数を求めたいと思います。そして、魔女をよっつけます。がんばろうね	○教師の顔を見る。 ○魔女の登場にさわく。 ○黒板の挑戦状を見る。 ・うなづく。 ・指を出して数える。 ・手を挙げて答えようとする。 ・挙手 ・黒板のプリントにマジックで印をつけていく。 ・全部4 ・5こ ・20 ・挙手「20」	◎問題の提示の仕方の工夫 劇ですること、子供も興味をひいている。 ◎場の使い方の工夫 子供を集めることで子供の得られる情報を制限し、学習課題に向けての方向付けをしている。 ◎「たくさん」を繰り返し使うことで、自分なりに工夫して表で表わしていくことが本時の課題であることを意識できるようにしている。 ◎教師が「指一本一本で子供に考えたことをたずね返しているようにしていくことで、大切なポイントを押さえずに説明できるようにしている。可能なら事前に説明のポイントを明示し、子供がそれに合わせて話しているようにしているのではないか。 ◎言葉での説明だけでなく、黒板に使うプリントを見せながら説明することで子供たちが理解しやすくなっている。 ◎T2が説明をしているのと同時にT1が黒板のプリントを動かして次の活動で黒板が使いやすいうようにしている。 ◎プリントを多く用意しておき、ねらいに向かって多くの方法を考え記録できるようにしている。

図3 授業観察記録シート例

このシートは、A4の用紙に縦3列の枠を設け、それぞれの枠には左から「教師の働きかけ」「子どもたちの反応」「気づいたこと」を記録・記入するようにしている。初めに代表的な三つの観点を持って授業を観察することにより、観察方法のいろはを身につけることをねらいとする。このうち「教師の働きかけ」は当該授業の学習指導案を読めば授業前に予想することが可能である。今回提供戴いた授業録画には、何れも学習指導案が用意されていたので、それらも配布資料の一部とした。そして、事前指導(1)の最中及びその後、自分たちの記録をじっくり評価できるように授業観察記録例を用意した。これは、宇都宮大学大学院教育学研究科の院生及び附属小学校の現職教員に、小2算数の授業録画を実

際に観察して書いて戴いたものである。自分の記録と自分たちに近い立場の大学院生の記録、本職の目から見た記録とを比較することにより、目標設定及び自分の到達度の評価ができることをねらいとした。

資料として学習指導案があっても、実際に流れている授業の中で「導入」「展開」「まとめ」の区切りをどこにするのかは、見る人によって若干ばらつきが出る。今回は指導内容の均質化を図るために、推進室の2年次担当教員が学習指導案と照らし合わせながら録画を観察して区切りを設定し、配布する学習指導案に点線で区切りを入れ、DVDを切/入する時間を書き入れた。

指導の最後に観察日誌（授業観察記録）の書き方指導を行った。平成20年度の教育実習Iでは一日の終わりに授業観察記録（各人一枚）と観察日誌（学年/クラスごと）を書いてもらい、授業観察記録は主に実習生どうしの相互添削を行い、観察日誌は引率教員が添削を行っていた。平成21年度はそれらを「観察日誌」に一本化することとした。事前指導（1）では、観察した小2算数の授業の観察記録をA4の記録用紙半分程度に整理して書かせ、受講生どうして相互添削・意見交換を行わせ

以上のことを表にして整理し、事前指導（1）事前講習会において担当教員への指導に活用した。（図4）

表 ビデオ視聴による指導の概要		
ビデオ	担当教員の動き	学生の動き
導入	<ul style="list-style-type: none"> ①視聴用紙の概要説明 ②授業観察の視点の説明 ③ビデオ（小2算数）の再生操作 ④授業の概要の紹介（ビデオ1分30秒） ⑤ビデオを停止し、視聴する授業の概要を確認させる（資料：指導案、ポイントの概略） ⑥ビデオを再生し、「導入」を視聴させる ⑦初期段階による支援をする 	<ul style="list-style-type: none"> ○これから視聴する授業の概要を知る ○「教師の働きかけ」「子どもの反応」「気づいたこと」の三観点で授業観察を行い、記録を取る練習を行うことを確認した。
展開	<ul style="list-style-type: none"> ⑧ビデオの停止操作（ビデオ約4分） ⑨小グループでの振り返り作業の指示（約15分） ⑩「導入」の授業観察の視点確認 ⑪観察記録の書き方の確認 	<ul style="list-style-type: none"> ○振り返り時の作業（約15分） ○授業観察の視点と数名を発表 ○担当教員のコメントを聞く ○数をずつ組となって観察視点を紹介し合う
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ⑫⑬⑭前の作業の振り返り（1分〜） ⑮「展開」の授業観察の視点確認 ⑯「まとめ」の授業観察の視点確認 	同上
観察日誌	<ul style="list-style-type: none"> ⑰整理のポイント指導 ⑱見本・添削例配布 ⑲個別にアドバイス 	<ul style="list-style-type: none"> ○整理のポイントを確認し、観察日誌作成 ○記録の見本・添削例を見て、学生間で相互添削

※ビデオは、50名程度が一つの教室で視聴する。
 ※小グループごとの振り返りは、「導入」、「展開」、「まとめ」の各節目で15名程度に分かれて行う。
 授業観察の視点、観察記録のポイント確認、観察記録の取り方の個別指導
 - 10分間休息 -

3. 小学校体育の授業を観察し、観察の視点、記録のとり方などを指導。

○到達目標

- ・授業の流れ（導入→展開→まとめ）が見えるようになる。
- ・授業の流れに沿って、「教師の働きかけ」や「子どもの反応」を記録できるようになる。

図4 事前指導（1）の流れ、到達目標

4. 事前指導（1）事前講習会

以上のことを一般の大学教員に資料だけ渡してお願することは難しい。そこで、推進室では担当教

員に対する事前講習会を開催することとした。講習会は全ての担当教員が出席できるよう、異なる曜日の2回開催とし、6/23（火）、29（月）の9～10時限に実施した。場所は教育実践総合センター2階の実験授業室を使用し、23日の参加者は9名、29日の参加者は6名であった。

事前講習会では「H21年度教育実習事前指導（1）の指導方法について」、「指導ポイント概略」、「指導案（小2算数展開部）」、「授業観察記録シート」、「授業観察記録例」、「観察日誌」を資料として配布した。以上の資料に従い、事前指導（1）の内容を説明した。

初めに、小2算数の録画を再生し、「導入部」までの観察を行った。そして、配布資料（図3）に従い担当教員の仕事について説明を行った。

まずは「授業観察記録シート」を紹介し、本活動では「教師の働きかけ」「子どもたちの反応」「気づいたこと」の三観点で授業観察を行い、記録を取る練習を行うことを確認した。（図3「担当教員の働き」①②）そして、再生機器の取り扱い方の説明（同③⑧）、観察の動機付け（同⑤）、録画再生中の机間指導（同⑦）、観察後の振り返り（同⑨-⑩）について、学生の活動との対応を取りながら説明を行った。学生は三観点を意識しながら記録を取り、観察記録をグループ内で共有することが主な活動となる。

授業の「導入」「展開」「まとめ」ごとに同様（⑥-⑩）の活動を行い、授業観察・観察記録の取り方の指導は一段落となる。最後に、授業全体を振り返って、その授業の観察日誌の形式で整理させるためのポイントを説明した。資料の中に示した整理のポイントは次の通りである。

- ・授業の視点に留意してまとめる。
- ・「導入」「展開」「まとめ」の流れを明確に。
- ・「教師の働きかけ」「子どもの反応」「教材」など、テーマを絞って整理。
- ・8割程度は埋める。
- ・単なる発言等の列記にならないように。

上記に留意しながら文章としてまとめ、学生相互の評価を受けた後、自分でまとめるという段取りである。担当教員からの指導があった方が望ましいので、時間と相談しながら、何例かは特徴的な文章を取り上げ、全体にコメント付きで紹介することをお願い

した。

担当教員から多く出たのは、やはり指導に対する不安である。今回、図3に示すように、到達目標を次の二つに設定した。

- ・授業の流れ（導入→展開→まとめ）が見えるようになる。
- ・授業の流れに沿って、「教師の働きかけ」や「子どもの反応」を記録できるようになる。

これらの目標を達成するためにはどのような指導が適切か、ということであった。そこで、「授業観察記録例」や他の学生の見方・記録を到達の指針として活用する方法を提示した。他人の見方・記録を共有するという活動は、知識の伝達だけではなく、自分と他人の考え方の違いに気づくことにより自分のやり方を客観視するための一助となる。そして、大学院生、現職教員の高いレベルの例を見て、現在の自分との到達点の違いを感じるだけでも指導の効果があつたと評価できる。そういった意味では、各担当教員の考え方の提示も学生の学びには大いに役立つので、できる限り言葉をかけるようお願いした。観察日誌の書き方指導についても同様の御指導をお願いした。

5. 事前指導（1）の実施

実施当日、推進室員が中心となって学生の出欠確認や席の指示を行った。当日は、初めに全体説明を2101教室で全員まとめて行い、その後、グループごとに指定された教室へ移動し、授業観察・観察記録の指導を受けるという流れであった。

平成21年度 教育実習事前指導(1)席配置

	音楽(3列)		
高校(2列)		保体・スポ健(5列)	
	英語(4列)		
理科(3列)		英語(2列)	
	社会・保健(3列)		
環境(3列)	美術(2列)	国語(4列)	
	数学(3列)	学校(3列)	
家政(3列)	作業用 作業用	作業用 作業用	
技術(1,5列)			

マルチメディア1、2202、2201、2501、2302、2101

図5 事前指導（1）席配置（教室ごとに色分け）

210名余りが移動する際の混乱を少なくするために、着席場所は専攻・コースごとに、移動の順番も考慮して指定した。その指示に、図5に示す掲示を用いたが、左右を取り違えて掲示するというミスがあり、少々混乱が生じてしまった。次回以降の反省点としたい。

全体説明は推進室の2年次担当教員が行い、「本日のスケジュール」「実習Ⅰの目的」「実習Ⅰの心構え」「実習Ⅰの概要（内容）」についてパワーポイントを用いて説明を行った。そして、グループごとに担当教員が指定の教室へ引率し、授業観察の指導を行った。

実施体制として、担当教員以外に各教室に推進室員が一人張り付く形をとった。そして、推進室の2年次担当教員一人が全体を巡回することにし、何かあった場合は直ちに対応が取れる体制で臨んだ。

担当教員による指導は概ね順調に進んだ。一部屋だけ椅子の数が足りず、急遽空いていた別の部屋へ移動して指導を行うこととなった。関係教員及び学生には迷惑をかける結果となり、大きな反省点となった。ただ、このようなトラブルにも関わらず、指導自体は順調に終わることができたのは、事前講習会の効果や、上述の実施体制が図らずもうまく機能した結果であると考えられる。

6. 担当教員、受講学生の評価

事前指導（1）終了後、担当教員及び推進室員に「指導の効果（学生の様子）、ご自身の負担感・やりやすさ、内容や段取りの改善点、その他」に関して自由記述で回答を求めた。回答戴いた方は全体で5名と、少々寂しい結果となってしまった。こういった調査の場合、「返事が無いのが良い返事」との解釈も成り立つが、次年度以降の反省点の一つとしたい。

回答を見ると、前述の椅子の数の話やAV機器の操作のトラブルなどが言及されていたが、全体的な流れは概ねうまくいっており、学生の学びという点では良い演習になったという評価であった。ただ、現状では指導教員だけに任せられると対応が難しいところもあるようで、推進室員のフォローが必要とされる場面もあった。また、教室内の三名の意識の持ち方に差があり、特定の教員へ負担が偏ったケースもあったようである。これは、推進室としては想定内のことであり、学生への指導の質を揃えるという

観点からは、複数の教員による指導体制が有効であるということが改めて確認できた。後述するように、教育学部の教員と一口に言っても、個人個人の教育実践科目に対する意識にはまだ大きな格差がある。負担の公平化や指導の質の向上のために、このギャップを全体としてできるだけ埋めていくことは必要であるので、他の委員会等と連携し、長期的な課題として取り組みたい。

受講した学生側の評価を得るために、教育実習Ⅰ終了時にアンケート調査を行った。平成20年度からの書式に変更を加えたため、表現が少々変わってしまったが、表1に比較の対象を示す。項目は、今回の事前指導（1）改定の影響があるもののみを示している。表中の数字はその項目に対する肯定的な意見の割合（%）を示す。

平成20年度 (%)	平成21年度 (%)
事前指導及びオリエンテーションの内容は判り易かった 72	事前指導（1）は実習Ⅰに活用できたか 85
	事前指導（2）は実習Ⅰに活用できたか 76
	オリエンテーション 86
事前指導の資料 83	事前指導（1）の資料 87
モデル授業&振り返り 83	事前指導（1）の内容 85
観察日誌作成 78	観察日誌作成 94
観察日誌の相互添削 83	観察日誌の相互添削 83

表1 教育実習Ⅰ受講生アンケート結果

全体的に数字が上がっているのは、内容が教育実習Ⅰに沿っていたことに加え、1ヶ月以上前に段取りをきちんと踏まえた指導を行ったので、見通しを持って教育実習Ⅰに臨むことができたためだと考えられる。表の項目の中では、「観察日誌作成」に対する評価の伸びが著しい。平成20年度も「モデル授業&振り返り」という形で授業観察の指導は行っていたが、「観察日誌」へのまとめ方の指導までは手が回らず、日替わりの担当教員による場当たりの指導と受け止められていた感がある。平成21年度は事前に教員、学生双方が記録整理の指導に携わったおかげで、観察日誌の作成や指導での混乱が減り、学生が有効な学びの機会として捉えられたと考えられる。また、「授業観察記録」を無くし、時間的にゆとりが持ったことも大きかったであろう。

7. まとめ-教育実習担当以外の教員が教育実践科目

の指導に携わる意義-

教育実習等の教育実践科目は教員養成系学部の基本となる授業科目であるが、多くの大学ではその企画・運営のみならず、実施に労を割いているのは、主に「教育実習委員」等の名で呼ばれる一部の教員集団である。本学部においても長らく「教育実習専門委員会」が教育実践科目の企画・運営・実施を一手に引き受けていた時期があった。このような業務の一極集中は、担当教員の過重負担のみならず、他の教員の無関心を誘起し、教員養成に対する学部全体での責任体制構築の弊害となっていた。

本学部では近年、学部全体による「責任ある教員養成」体制構築の流れの中で、教育実習担当以外の教員が、教育実習Ⅰの引率や、教職実践科目群の入り口である教師入門セミナーの運営・指導を通じて教育実践科目の指導に携わるといった体制ができてきた。今回、それを一歩進めて、長年の課題であった「授業観察・記録の方法」の指導を担当していただくところまでになった。このように、実際に学部を挙げて教育実践科目の指導に携わる例はそれほど多くなく、実践例として日本教育大学協会の全国教育実習研究部門において報告させて戴いた。¹⁾

今後の課題としては、学生へのサービスの質の向上である。体制として整ったとしても、分担方式なので最後は担当する教員に左右される部分が残る。今回は指導体制を、教員が互いにフォローし易いように設定したが、本来のあり方として、学部全体としてどのように底上げできるのか、カリキュラムと絡めて考えていかなければならない。そのためには、教育実践科目群を含めた履修順序を整理し、カリキュラムマップを早期に構築することが望まれる。

謝辞

事前指導（1）のために授業録画や学習指導案等を提供して下さった、数学教育講座の木村寛先生、カリキュラム開発学講座の加藤謙一先生に、深く感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 南伸昌、人見久城、渡邊弘、池本喜代正、「教育実践科目における一般教員との連携の推進」、教育実習研究（日本教育大学協会全国教育実習研究部門）、第22集、pp.12-13、2009.

